

【寄稿】

三味線系と放射線のかかわり

丸三ハシモト株式会社 社長 橋本圭祐

恒例の「私たちのくらしと放射線展」は今年も7月30日より6日間の日程で近鉄百貨店上本町店にて開催され、3万人を超える入場者を迎えることが出来ました。その中で毎年紹介される放射線照射の利用例の一つに楽器の糸が含まれることは周知の通りです。今回、三味線系製

万感を表現する楽器、三味線

三味線は江戸時代の代表的な楽器の一つであり、約400年日本固有の楽器として発展してきました。元文化庁文化財調査官の高橋秀雄氏の資料によると、三味線特色として地唄の名人である故高崎春昇師の芸談の中で、

“世界中にはずいぶんたくさんの種類の楽器がありますが、微妙な点では三味線に越すものはありません。バイオリンにしたところで、いい音は自在に出せるとしても、人の感情に突っ込んだ芸としてはどうい三味線にはかないません。三味線では、技巧の妙をつくせば、どんな芸当でもできるとされているほどです。”

と語っておられます。ここでは三味線という楽器が単に華麗な音階を表現するだけの楽器ではないということが示されています。その微妙な点を伝えるための有名な話の色々と残されています。

その代表的な例として一般にもっとも知られているものが「酒屋」のさわりです。義太夫節の「艶容女舞衣(はですがたおんなまいぎぬ)」の「酒屋の段」の一節で‘今頃は半七さん’と語った後に‘チン’と三味線の音色が入ります。その三味線の一つの音にお園という人物の万感のこもった感情が表現されていなければならないとされているのです。お園は半七の妻ですが、その夫半七は愛人の三勝のところへ行ってしまうのであります。1人であるお園はつい独り言というのでありますが、その言葉には半七に対する様々な愛憎が含まれており、複雑な女性心理が表出されなければならないのです。その感情を‘チン’というたった一つの音色で出すのがすぐれた三味線弾きの腕

造の事業でその技術が今なお健在であることをミニセミナーで話して頂く機会がありました。折角ですので、放射線との関わりが始まったいきさつなどもふくめ、三味線についての蘊蓄を寄稿して頂きましたので2回に分けて連載します。

とされているのです。

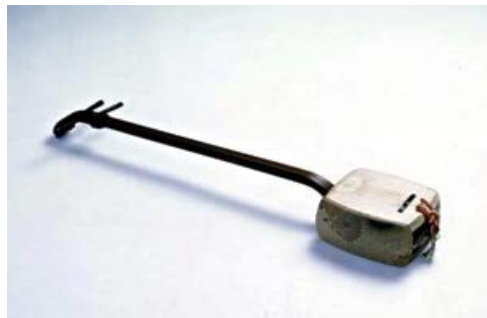
こんなエピソードから伺われるように、三味線という楽器は感情を表現するのに適した楽器であり、また音味(ねあじ)や音色にその生命があるということで様々な楽器の中でもきわめて特異な地位を占める楽器であるということが言えると思います。特に文楽発祥の地大阪には人形浄瑠璃などを通じてその感情が脈々と受け継がれています。

日本独自の発展をした楽器

邦楽器といえば琴、三味線、琵琶などがありますが、特に三味線は日本に渡来してからいろいろ改良されると共に、その種類も増え、日本独自の楽器として完成されたところに特色があります。

三味線は楽器学から言えば弦楽器の中のリュート属に属します。これが日本に渡来したのは永禄年間

(1558~70)とされていて、中国の三絃、沖縄の三線(さんしん)と同種の楽器であり、そこから改良されて現在の三味線になったことは明らかですが、それ以前の起源については諸種の考察はあるもののまだ定説が確立していません。渡来したこの楽器は日本人の手によっ



て寸法が変えられたり、蛇の皮を猫や犬の皮に変更されたり、さらには絃を撥で弾くように考案されたことで三味線とよばれる楽器となり、江戸時代の人々の関心を集めて近世邦楽の多種多様な発展に寄与するとともに、江戸時代の代表的な演劇である歌舞伎や文楽に不可欠な楽器として活躍してきました。

このように江戸時代に隆盛をみた三味線音楽ではありましたが、明治以降の西洋文化の流入、学校教育への西洋音楽の導入、日本人自身の趣味の多様化、さらには三味線音楽によく見られる遊里趣味への敬遠

など様々な要因が絡み合って、三味線音楽を中心とする邦楽の世界全体が停滞、後退の運命を辿って来ました。

それでも、伝統芸能の系譜は今尚続いてきておりますし、その水準もきわめて高く保たれているのですが、ただ、三味線演奏者人口が激減して来たため、その製作に携わる技術者や販売店の減少も進み、極めて危機が迫っているといえます。

楽器は糸が命

さて三味線は大きく分けて

1. 太棹(義太夫節)
2. 中棹(地唄、常磐津節、清元節、小唄用)
3. 細棹(長唄、
4. 民謡三味線(民謡用)

の4種類ありますが、いずれも太さから出た名称で、棹、胴、皮、駒、撥、そして糸等の部分からなります。

その中でも、前東音会(とうおんかい)の会長で東京芸術大学の故菊岡裕晃氏によりますと、三味線は糸が命、糸が全てを左右するとまで言われていました。

私共、丸三ハシモト株式会社ではその命とも言うべき、糸を製造しておりますが、これから三味線など和楽器糸の原料から始まる製作工程をご説明申し上げて参ります。

まず原料ですが、現在大きく分けて3種類を使用しています。まず、絹、そしてナイロン、ポリエステルとなっており、特に三味線糸に関して、今尚大半は絹が使用されています。では絹糸のルーツを遡ってまいります。

絹糸のルーツと滋賀県伊香郡

蚕を飼って生糸をとるといいうゆる養蚕はどこではじまったかというインド、中国の両説がありますが、遺跡からは中国説が一般化されています。紀元前1700年～1100年殷の時代にはすでに行われ、漢の時代(紀元前206年～紀元8年)中国全土に広がっていたと考えられています。その技術はのちにシルクロードと呼ばれるルートを通して西進し、中央アジア、ヨーロッパへと伝わっていきました。起点は洛陽あるい



は西安といわれています。

さて日本へはいつごろ伝来したのか。当時日本には文字がなかったので記録はありませんが、中国の魏志倭人伝によると3世紀頃あるいはさらに遡り1世紀ごろ、朝鮮半島を経て帰化人によってもたらされたと言われています。

大化の改新になり、国家の形態が整ってくると朝廷への貢物として絹を送ったそうです。正倉院の御物などの資料によると私共の住む近江の国ではアシギヌを生産していました。奈良朝時代になり、近畿から東北にまで伸び平安時代になって全国的な産業になったといわれています。

邦楽器の糸の原料である絹糸は現在滋賀県伊香郡木之本町大音、西山地区、東浅井郡浅井町野瀬などで作られていますが、その中でも大音糸がもっとも古いと言われています。大音糸は滋賀県伊香郡の祖神である伊香津臣命(いかつのみこと)の16代目伊香厚行(いかごのあつゆき)が始めたと言われています。彼は平安時代、菅原道真と同時代の人で、京都にて神祈官に任ぜられ、神社行政に当たっていました。この人が郷土の産業開発にも意を用い伊香具神社の境内にある枡の池の清水を引いて生繭を煮て糸を引かせたところ上質の糸が出来たのでこれを京都に持って行き、装束の紐や楽器糸を作り、全国に広めたといわれております。

楽器用絹糸の特徴

その原糸の絹糸ですが、春蚕の糸が一番上質といわれ、毎年6月初めに繭が岐阜県から届き、8月頃までの2ヶ月間糸取りが始まります。その糸取りですが、古来より楽器用絹糸は生びき座繰り製糸の方法により糸をひきます。織物用の繭はほとんど水分がなくなるまで乾燥させますが、楽器用は20～30%の重量減位までしか乾燥させません。これは糸の接着に必要なセリシンを適度に保有させ、糸に腰とねばりをもたらすので大変重要なものです。

製糸の工程

邦楽器糸は現在、絹、合成繊維を含めて約400種類近くあります。絹糸の場合は糸の太さに全て刃の単位を使い、その重さから太さを決めています。

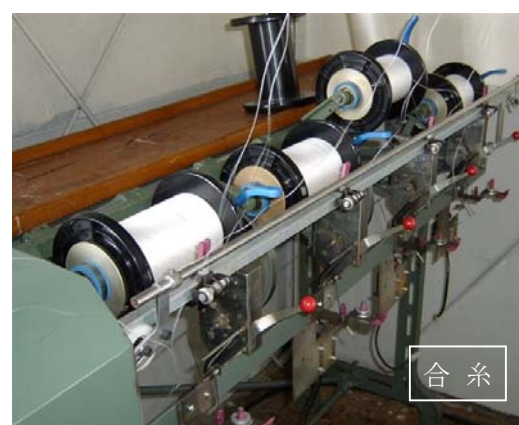
工程は以下の通りとなります。

- 1.「繰糸」 カセの状態が入荷するため、一本ずつ小枠に巻き換える。
- 2.「寸法取り」 張り撚り式撚糸法のため糸に定められた長さで結びを付ける。
- 3.「合糸」 5本を集め、1つに巻き換える。
- 4.「目方合わせ」 製造する糸の種類をここで決める。座繰り製糸のため、糸に太細があるため、目方を掛けることでそれぞれの太さを決める。
- 5.「撚糸」 独楽撚りと機械撚りがあり、独楽撚りは独楽の先に糸の先を結び、独楽を擦り、回転させることで撚糸する。全ての糸でかける回転数は違う。
- 6.「染色」 うこんで染め、同時にもち糊煮込みを行う。
- 7.「糸張り」 煮込んだ糸を糸張り柱に掛けて不要な糊を拭き取る。
- 8.「乾燥」 適度な自然乾燥をする。
- 9.「節取り」 糸に絡んでいる結び目や節を、周りを傷つけない様ハサミで削り取る。
- 10.「選別」 不良品を仕分ける。
- 11.「糊ひき」「乾燥」 漉した餅糊を付け裏面をコーティングし乾燥させる。
- 12.「裁断」 定められた寸法に裁断する。
- 13.「紙付け、糸巻き」 竹製の筒に巻き取り、はずして和紙で留める。
- 14.「選別、検査、出荷」 再度品質検査をして出荷。

合成糸の欠点と放射線の役割

以上のような工程で邦楽器糸は作りますが、ナイロン、ポリエステルが出来てから徐々に楽器糸にも使用されるようになりました。しかし、合成繊維は強度の点で優れていますが、音色では絹糸に及びません。

①糸が伸び易い ②調子が変わる ③音色に張りが
ない④余韻が少ない、などの欠点があったのです。



そういう問題点を抱えていたところ、たまたま私の親戚が大阪府立放射線中央研究所の武田先生と面識があり、放射線の利用について紹介され、古田先生を紹介されて研究をして頂くようになりました。線量については色々なデータをとって現在の放射線照射三味線糸となりました。

津軽三味線音楽の隆盛に寄与

この製品は従来の合成繊維糸と比べ、伸びにくく、音色に張りもあり、現在では三味線糸、特に津軽三味線に大変よく合い、今までの繊細な津軽民謡から現在の激しく、豪快な音色まで出せるようになりました。

現在の津軽三味線音楽の隆盛に大変寄与しているものと思われます。

古田先生の大変なるお力添えとその後の三味線部材の色々な研究にご指導頂いた岸上先生、大西技師など研究所のスタッフの皆様のおかげだと思っております。

眼に見えないガンマ線がナイロン、ポリエステルの変え、心地よい音色となって、世界中で鳴り響いていることを考えると何か不思議なものを感じます。

今後とも各方面、様々な分野で放射線利用が進めばと祈念申し上げます。



独楽練り



糸引き



節取り



ナイロン糸

